

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4572000752		
法人名	特定非営利活動法人 仁秀会		
事業所名	グループホーム たいよう	ユニット名	一号館
所在地	宮崎県児湯郡都農町大字川北6219-42		
自己評価作成日	平成27年2月3日	評価結果市町村受理日	平成27年5月7日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人宮崎県社会福祉協議会		
所在地	宮崎市原町2番22号宮崎県総合福祉センター本館3階		
訪問調査日	平成27年3月19日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

今年でグループホーム開所11年目と2号館は3年目となります。この一年間は入居者の方達の入・退去や職員の異動、新入社員を迎え入れもあり、慌ただしさと共に入居者のケアのあり方を深く考えさせられた年でした。入居者の方々と生活を共に送り、支えていく毎日の中で、入居者の方も高齢となり、身体と心の健康が不安になる事も出てきました。入居者同士が助け合い、不安を笑いに変えていく、思いやる心が溢れているホームだと思います。温かい環境で仕事ができる事に感謝し、謙虚な姿勢で、人として「当たり前」の事を、心を持ってきちんと行うことが私たちのやるべき仕事だと考えます。「今日より良く生きる」為に、皆さんが安心して生活できる居場所を作り、家族や知人がいつでも訪問できる環境を整え、太陽のような明るさと温かいホームを目指して、努力したいと思います。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

ホームを訪れると、利用者の明るい表情や笑顔で迎えられた。食事の同席中も、一人ひとりがホームでの生活を安心して楽しく過ごしていることが、対話や表情からうかがえる。職員は優しい笑顔で、利用者の個性やその日の気分に合わせてように、高低、強弱のメリハリのある声掛けをし、受容だけでなく励ましの言葉で思いを引き出している。全職員が、利用者のためのホームづくりを共有することを新たな理念に掲げ、日々努めている。運営者及び管理者は、職員が意欲的に、かつ働きやすい職場づくりのために、職員の意見をくみ取り、パート職員の導入や資格取得のための研修参加等に理解を示している。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	一号館	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	昨年理念の見直しを全員で行った。地域とのつながりを大切にするという文言を追加し、スタッフ全員が分かりやすい理念を作成した。職員の目の付く所に掲示して、意識した取り組みが出来るよう心掛けている。		新たな理念は、「その人らしく生き続けられるような支援。地域とのつながりの継続。利用者への職員の接し方。」と具体的に理解しやすい文言にし、日々の実践につなげている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	近くの小学生との交流や中高生の職場体験を受け入れています。近所の神社祭りに出掛け、知人と会うなど、交流する機会を作っている。		理事長自身も地区住民であり、ホームも地区自治会に加入しているので、相互の理解が得られやすい。小学生の来訪や中学生の職場体験先として受け入れている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域貢献と言えることはできていない。地域の方々に認知症についての理解や支援方法を働きかけていきたい。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	活動内容や入居者の方の状況を報告し、その中で出た意見や助言を会議で報告し、サービスの質の向上に努めている。		会議は事務室で開催しているので、利用者の日常を把握する場にはならないが、家族代表や他の委員からの意見は活発で、防災訓練に地区の消防団や住民の参加を勧めるなど、建設的な提案も多く、サービスの向上につなげている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	日頃より担当者がホームに来られたり、電話連絡や相談等も行っている。		町の担当者や地域包括支援センターの職員とは、相談や解決に向けて一緒に取り組むなど、協力関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束についてのマニュアルを作成している。どんな行為が拘束になるか、会議や新人勉強会等で取り上げて話し合っている。		身体拘束のマニュアルを作成し、職員、特に新任職員研修を徹底している。あわせて、「虐待の芽チェックリスト」を活用し、言葉かけや介護方法に注意を払い、拘束をしないケアに取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員会議で、施設長から虐待について話があっている。職員の言葉掛けや態度が虐待に繋がる事の話をしている。			

自己	外部	項目	自己評価	一号館	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護に関して学ぶ機会が少ないが、必要としている人達にこのような制度があることを伝えている。			
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時に説明し、解約時は承諾を得られるよう努めている。			
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族会の時に話し合いの場を設け、意見や要望を伺う機会を作っているが、具体的な意見は出ていない。今後、個別に意見が出せるようアンケートの実施も考えたい。	職員は、利用者との日々の会話、食事や入浴を思いを把握する機会と捉えている。年2回の家族会では、なかなか意見が出ないので、来訪時に聞き取るよう努めている。		
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員会議やミーティング等で職員からの意見を聞くようにしている。会議では施設長に直接意見を言う事が出来るので、施設長も運営に反映させやすい。	毎月1回の職員会に、全職員が参加できるよう、会議中の夜勤を運営者が担当している。また、職員の意見で、受診に職員が同行する間、必要であればパート職員を炊事担当で補充している。		
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	施設長と管理者が、機会あるごとに各職員の状況を話し合うようにしている。実績に応じた昇給や資格・職種に応じた各種手当・希望休・有休を取得できるようにしている。			
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内では、職員会議で研修報告や施設長による勉強会などを行っている。法人外ではグループホーム連絡協議会やいろいろな分野の研修に全員が参加できるように努めている。			
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム連絡協議会に加入し、研修会や懇親会等に積極的に出席している。ネットワークを広げて、情報交換の場としている。			

自己	外部	項目	自己評価	一号館	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援						
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人の言葉や表情から心情を読み取り、現在の状況を理解・把握するように努めている。			
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご家族の現在置かれている状況や思いを知り、受け止めるように努めている。話ができるように、時間は十分とるようにしている。			
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人や家族の話聞いて、何が必要なのかを検討するようにしている。			
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の出来ることは自分で行うよう、声かけや一緒に取り組むように心掛け、生活を共にしていく人として関わるように努めている。			
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会に来られた時は、ゆっくり過ごせる時間を、また、職員とも話せる時間をつくり、お互いに相談、要望などを話せるように努めている。			
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	知人が訪れたり、馴染みのスーパーや床屋、墓参りなど、職員や家族が外出支援を行っている。継続的な交流ができるように働きかけている。	買い物、外食など、外出を伴うことは、家族の協力によるところが大きいですが、デイサービス参加の友人、知人との交流や電話や年賀状作成の支援を行っている。		
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	日常の入居者の会話や行動、表情等を通して、関係を把握するようにしている。入居者同士で優しく声を掛け合い、思いやり、支えあっていると感じている。			

自己	外部	項目	自己評価	一号館	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	必要に応じて、移り先の関係者に情報を提供している。ご家族にはいつでも相談できる事を話している。			
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント						
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	一人ひとりの思いや希望を聞くようにしている。思いが言えなかったり、難しい場合は言葉の中から感じとり、会話を工夫して言葉を引き出すようにしているが、十分とはいえない。また、会議で本人の思いを把握するようにしている。		日々の関わりの中で意向を出しやすい雰囲気づくりや職員全体で気づいた意向を出し合い、その人らしい暮らしの支援を行っている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人や家族に今までの生活歴などを聞いている。会議等で情報を交換し、ホーム生活に活かせるようにしている。			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	職員は気付いたことを記録に書きとめ、会議等で意見交換を行っている。一人ひとりの言動からできる事、分かることなどに気付けるように努めている。			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人や家族から話を聞いて、思いや要望を知るようにしている。職員は言葉を書きとめたり、会議で話し合い、計画を作成している。変化に応じ、家族と話し合いの場を設けている		介護計画は、本人及び家族の希望や意見、職員の情報や介護記録を参考に、計画作成担当者が作成している。3か月ごとにモニタリングし、6か月ごとに見直しを行い、現状に即した介護計画を作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	その日の様子や言葉、表情等、気付いた事を具体的に書くようにしている。ミーティング等で情報交換し、把握するようにしている。計画の見直しに記録を活用している。			
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人や家族の状況に応じ、病院受診や個別の外出支援等が柔軟に対応できるように配慮している。多様な支援など、十分といえる取り組みまではいっていないが、協力できる事は行うように努めている。			

宮崎県都農町 グループホームたいよう(一号館)

自己	外部	項目	自己評価	一号館	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域資源の把握に積極的に取り組めていない。ボランティアの方々の訪問はあるが、地域資源の活用や働きかけが少ない。			
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	月に一度は協力医の往診を受けている。検査や入院などが必要な場合は、本人、家族が希望する検査や病院で治療が受けられるように支援している。	本人のかかりつけ医の受診や往診で適切な支援を行っている。受診には家族が同行しているが、状況により必要な場合には、職員が同行している。		
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	本人のいつもの状態を把握し、変化や気づきを看護師に報告、相談をしている。重篤化しないように、早期に発見、対応できるように努めている。			
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は情報提供書を作成し、細かなことも看護師に伝えるようにしている。入院中も面会や電話で状態を聞く等、情報交換を行い、退院に向けた話し合いを行っている。			
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居契約時に看取りは行わない方針は説明している。今後考えられる状況により、ホームでの生活が困難になる場合は移り先やホーム側でできる事と出来ない事を説明し、本人や家族、かかりつけ医と段階的に話し合いをしている。支援できる事は全力でサポートする方針である。今後は職員全体で話し合いを重ねていきたいと考えている。	看取りを1例経験しているが、当時と比較して、看護師の勤務者がおらず、協力医は他市からの通勤で夜間や休日不在のため、急変時の対応が確立していない現状では、重症化や終末、看取りができないことを家族に説明している。一方で、支援可能なサポートは行う意向であるが、重症化の段階に対する支援の在り方など、具体的な検討には至っていない。	看取りができない方針について、書面にて家族への説明と同意を得ることが求められる。終の棲家としてホームを選択した家族に対して、終焉の場としての受け入れ先を、行政、協力医、訪問看護や通所介護事業所などと検討し、家族の安心を担保することを期待したい。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	消防署職員による救急法やAEDを使った心肺蘇生法を学ぶ機会を年に一度設けていたが、昨年は実施できていない。3月に行う予定である。事故発生時のマニュアルは作成している。			
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	自動通報装置を使用し、通報訓練や夜間を想定しての避難訓練、水消火器を使って消火訓練を年2回行っている。3月に予定している避難訓練では、地域住民、消防団の参加も考えている。	夜間想定を含め、年2回の火災避難訓練を実施している。居室は高窓のため、内外からの救出ができないため、リビングの掃き出し窓からスロープにでる避難経路を確立している。次の訓練には、地域住民や消防団が参加することになっている。		

自己	外部	項目	自己評価	一号館	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援						
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者の方の気持ちを考えた優しい言葉掛けや態度を心掛けている。入浴や排泄時は自尊心を傷つけないように配慮している。		会議やミーティングでは、利用者一人ひとりの尊厳とプライバシーについての意識づけを行っている。居室への出入りやテーブルの座席配置、人格や誇りを傷つけない言葉かけや入浴の同性介助などに気配りしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	思いを表せない人には言葉かけを工夫し、思いを引き出すようにしている。日常生活の中で自己決定できる機会を増やしていきたい。			
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	朝、ゆっくり寝ていたい方は本人の希望にあわせて起床していただいている。一人ひとりの希望に柔軟に対応している事もあるが、不十分である。			
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	洋服は選んでいただき、髪結いなどできる方は鏡を準備し、自分でできる事は行っていただいている。家族や本人の希望で、白髪染め、散髪も行っている。			
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	料理の下ごしらえや味付け・盛り付け、配膳、台拭き等、それぞれできることをしていただいている。近所に野菜取りに出掛けたり、四季に合わせた旬のものを彩りよく盛り付けるなど、楽しい食事になるようにしている。		ユニットごとに利用者の希望を取り入れた献立を日勤者と遅出の職員が調理し、利用者も力量に応じて参加をしている。畑で収穫したばかりの野菜をふんだんに使い、食材特有のとりみを利用し、食べやすく工夫している。職員も一緒に食事をし、会話が弾み、楽しい雰囲気となるよう努めている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人ひとりの食事・水分量・栄養状態などを把握し、咀嚼や嚥下に問題がある方には食事形態を変えて無理なく摂取できるようにしている。水分摂取が足りない方には、好む飲み物を用意して水分摂取量の確保に努めている。			
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後に口腔ケアを行っている。歯の状態が悪化したり、入れ歯の不具合があれば家族に報告し、歯科受診を行っている。			

自己	外部	項目	自己評価	一号館	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	日中はトイレで排泄されている。排泄時間を記録し、排泄パターンを把握し、失敗なく排泄できるように心掛けています。尿とりパットを徐々に外すなど、自立に向けた支援に努めている。		排せつの自立習慣を継続するよう、記録表を活用し、パターンやサインに注意し、さりげなくトイレに誘導している。夜間だけ居室でポータブルトイレを使用する場合もあり、排せつの自立を支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分摂取量を増やしたり、食事の工夫や体操、散歩などを取り入れ、薬の使用を減らせるように支援している。			
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴は毎日行っている。浴槽につかれない方はリフトを使用し、ゆっくりと入浴できるように、少ない人数での入浴となっている。しかし、時間帯は職員の多い屋間となっている。		洗い場が広いユニットバスで、介助用椅子や浴槽用リフトを使用し、ゆっくりとした入浴を支援している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	好きな時間に居室で休めるようにしている。定期的に布団を干し、冬場は電気毛布や湯たんぽを使用し、気持ちよく眠れるように支援している。			
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬のファイルを作成し、職員がいつでも把握できるようにしている。薬の変更も、その都度連絡帳や会議で報告し、把握に努めている。往診時に主治医に症状の変化などを報告して、薬の調整を行っている。			
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	本人の興味、関心のあることを見つけるようにしている。習字や裁縫、料理や歌などを楽しめるように、また、洗濯物たたみ、お盆拭き、モップかけなど一人ひとりの力を活かした役割をもち、職員も一緒に楽しんで行う事で、入居者の笑顔がみられている。			
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	お花見ドライブや買い物、息子さん宅に出掛けたり、毎年、ぶどう狩りや航空祭に招待され、ご家族を誘い出掛けている。敷地内のデイや二号館へ知人に会いに行かれている。ご家族の協力を得て、外食や馴染みの美容室、親せき宅や墓参りに出掛けている。		町内の果樹園や近接の航空自衛隊基地の航空祭に毎年招待され、年間行事の楽しみの一つとなっている。家族の協力も得ながら、希望する外出の支援に努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	一号館	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金の所持は家族と相談している。財布を持つことで安心する方は持っているが、使う事はない。家族に持つこと、使う事の大切さを理解していただけるよう話し合う必要がある。			
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	遠方の家族と電話や手紙のやり取りをしている。ホームでの生活の様子の写真やホームの新聞を郵送し、喜ばれている。			
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	リビングにはゆったり座れるようにソファを置き、季節に応じた入居者手作りの装飾品や花を飾って、季節を感じられるように工夫をしている。湿度や温度、音、光等に配慮している。	リビングや廊下は天井が高く、天窓からの自然光で明るく解放感がある。食事以外はソファに移動してテレビをみたり、ゲームを楽しんでいる。浴室やトイレは引き戸のため出入りしやすくなっている。リビングから掃き出しのバリアフリーのウッドデッキは、散歩や避難時に使うことができるよう工夫されている。		
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	少人数で過ごせる和室にはテレビとソファを用意し、気の合う人達が集い、心地良く過ごせるように工夫している。			
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅で使っていたダンスやベッド等を居室に置いている。家族の写真やカレンダー、賞状などを配置し、居心地良く過ごせるように努めている。	作りつけのクローゼット以外は本人や家族の希望する物が使われ、職員も相談に応じている。居室は畳間であり、ベッドを使用している。時々畳の上で横になったり、家族が来てくつろげるよう配慮している。		
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室の入り口には、住んでいた自宅の地区名入りの表札で確認できるようにしている。目印で赤い花を飾ったり、工夫をしている。			